

# 保健所 負担再燃

## 「感染スピード 毎回準備を上回る」

## 発生届簡素化 症状把握には壁

新型コロナウイルスの「第7波」で、感染者がかつてないスピードで規模を増えている。保健所の業務が再び逼迫し始め、機能の停止に陥れば、自覚で亡くなる患者が出るおそれもある。抜本的に負担を軽減するためには、感染経路上の扱いを「2類相当」から「1類」に引き下げるべきだとの声が出て、議論はまだこれからだ。

「感染の波に毎回備えても、準備を上回る感染のスピードになる。職員の負担は明らかに増えている」。東京都葛飾区保健所の小島絵里・保健予防課長はこう語る。職員は連日午後10時ごろまで働き、土日も当番制で出勤する。

新型コロナウイルスで、保健所が担う仕事は多い。発生届の処理▽感染者の入院調整▽自宅療養者の健康観察▽感染経路や濃厚接触者を調べる積極的疫学調査――

感染者が大量に増えるたびに、対応が難しくなる。中でも発生届に関する業務は大きな負担だ。医療機関が国のシステムに直接入力する場合もあるが、保健所にファクスで届けるとも少なくない。葛飾区保健所管内の発生届は、このように1日600件を超え、うち3割は医療機関からのファクスを保健所が手作業で入力している。診療が終わった夜に、大量のファクスが届くこともある。

負担を軽減するため、厚生労働省は6月、発生届を簡素化した。感染者の名前や住所など10項目があったが、症状や感染経路などは省くことにした。

東京都新宿区の「牛込合

「魚指を縮くするため、厚生労働省は6月、発生届を簡素化した。感染者の名前や住所など10項目があったが、症状や感染経路などは省くことにした。」

「医療機関から歓迎の声が上がる一方で、保健所では困った事態も起きています。重症化のリスクがある感染者を見極めるためには、症状の把握が欠かせない。感染者が比較的少ない地方では電話で患者を確認する

## 「インフル並み」扱い 強まる声

保健所の負担を抜本的に減らす方法の一つが、感染経路上の新型コロナウイルスの扱いを変更することだ。

いまはエボラ出血熱や結核といった1、2類に近い、厳格な対応をとっており、感染者の全数を把握し、入

院や健康状態の報告も求められる。こうした仕事がありにも多いため、重症化リスクが高い患者への対応

## 時時刻刻



新型コロナウイルス感染症に対応するための保健所の主な仕事



## 現場工夫 懸念なお

保健所は新たな波をどう受け止めるか悩んでいるのか。東京都江戸川区の江戸川保健所では、効率化を目指し業務の見直しを進めてきた。第6波の1月中旬からは、重症化リスクが高いと判断された感染者は保健所の本体で健康観察などを担当し、分室ではリスクが低いとされた感染者を受け持つ体制に変更。分室では現在、普段はコロナを担当していない区からの応援職員らが役割ごとに部屋を分けて作業する。「発生届入力」のほか、自宅療養中の感染者と定期的にする「距離調査」「ローリスク健康観察」「冠

## 業務軽減 電話かけずSMSに

子調査」といった具合に業務を分ける。感染者への症状確認も4月から携帯用電話を持っていて基礎情報が無い人には電話での聞き取りではなく、ショートメッセージ(SMS)で入力してもらうようにした。電話がつかない場合のかけ直しの手間がなくなったという。こうした業務負担の軽減で、コロナ対応にあたる他部署の応援職員は、感染者が1千人ならこれまで約2,000人必要だったが、今は50人で対応できるようになったという。区の1日あたりの新規感染者数が一番多かったのは2

## 第7波警戒「まだ波のたちあがり」

月中旬の約1,370人。第7波を考慮し、1日最大1,700人の感染者を想定した対応までは準備しているという。ただ担当者は、行動制限がなければ感染が止まると言っかけていないことを懸念する。16日の新規感染者は1,180人まで増えた。「今はあくまで波のたちあがりの途中。第6波以上の感染者になることもあり得る。早めに対応を考へなくては」。応援を出す部署から事前に派遣可能な職員のリストを集め、配置を事前

に決めておくことで、急増した感染者に速やかに対応できるように準備する。(島崎潤)

きこむら内科」では、1人あたり10分ほどかかっていた入力力が、7分ほどになった。ワクチンの接種履歴を日付で入れていたところ、最新の接種履歴だけで済むようになったことが大きいという。

全国保健所長会会長の内田勝彦・大分県東部保健所長は、発生届の簡素化は「保健所のメリットにはなっていない」と指摘。「医療機関の声だけを聞き過ぎた印象。双方の話をよく調整してほしい」と話